



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 25 回 日本語教育方法研究会
徳島大学
2005 年 9 月 17 日 (土)

会長 仁科喜久子

今回は、徳島大学のご厚意により第 25 回研究会を開催する運びとなりました。
是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 25 回開催について

日 時 :	2005 年 9 月 17 日 (土)
会 場 :	徳島大学 <small>じょうさんじま</small> 常三島キャンパス 大学開放実践センター
開催委員 :	大石寧子 (徳島大学) 小島 聡・総田はるみ (東京工業大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付, ポスター貼付	1:40	講演
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開催校挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:00	あとかたづけ
		5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みはありませんので、直接会場にいらしてください。
懇親会にも是非ご参加ください。

懇親会場：大学生協・第一食堂

【プログラム】

【午前の部】

口頭発表（5件）

1. 初級音声教育の試み - 日本人学生との会話スキット作成から朗読へ -

上田崇仁・Gehrtz-三隅友子（徳島大学）

留学生センターの予備教育（6ヶ月集中コース）において、実施した音声教育の試みを報告する。音声教育に関しては、初級段階における重要性が問われているにも関わらずまだまだ開発途上といえよう。そこで、従来の音声教育とは、違う視点からの二つの活動を初級クラスに組み込んだ。その一つは、テキストの会話部分を取り上げ、その場面を自分に即したものに变えた会話スキットを日本人学生と協力して作成し、さらにスキットを実際に演じ、録画したものを一緒に視聴するというものである。もう一つは、学習者による詩の朗読DVDの作成である。文字からでなく音から詩を認識し、映像を見ながら詩をに暗誦して録音するというものである。両活動に共通するのは、学習者が自分の音声に気づく機会を持つこと、日本人との共同作業を通して日本人を発音のモデルとしてとらえること、さらに演じることによって作品にすることである。これらは、従来の「苦痛」を伴う音声教育をより楽しく自発的に取り組めることを考慮している。

2. 「上級文法」のとらえ方 - 中国語母語話者教師と日本語母語話者教師へのアンケート調査から -

小野正樹（筑波大学）

中国国内で日本語教育に従事している人を対象に、文法観についてアンケート調査を行った。教授者としての文法観では、初級、中級、上級を積極的に分ける意見、日本語能力試験の項目が初中上級の分類だと考える消極的意見、そして、区別はないとする否定意見に分かれた。また、学習者側からのとらえ方としては、中国語母語話者教師と日本語母語話者教師を問わず、初中上文法という区別を感じたことはないという回答が見られた。上級文法は「日常的には使わない」という中国語母語話者教師の意見があり、上級文法を再考するための貴重な指摘だと考えたい。

3. スピーチ活動における評価とフィードバック効果

古賀美千留・中島晶子（リュブリャーナ大学）

本発表では、リュブリャーナ大学（スロベニア）で行ったスピーチ活動に関する調査の結果について分析を行い、スピーチ活動の評価に関わる諸問題を取り上げる。分析は、スピーチ大会での学習者・教師・ゲスト参加者の評価結果およびアンケートをもとに、三者がそれぞれ何を肯定的／否定的に評価したか、学習者のフィードバックがどのような効果をもたらしているのかについて行った。その結果、教師の評価では教室活動や言語面への偏りが見られるのに対し、ゲストは文化社会面への指摘を含めた、より総合的な評価をしていることが確認された。また、学習者の自己評価による問題点の「気付き」が、学習活動の発展に有効である点を指摘する。

4. ウェブ版ロールプレイ練習のデザインに関する評価

才田いずみ・栗原通世（東北大学大学院文学研究科）・徐智允（東北大学大学院教育情報学教育部）

・川添良幸（東北大学金属材料研究所）・高橋亜紀子（宮城教育大学）・小河原義朗（国立国語研究所）

・内山潤（金城学院大学）・井口寧（北陸先端科学技術大学院大学）

遠隔日本語学習を考える学習者のための教材充実の試みとして、ウェブ上に置いたビデオ映像をもとにロールプレイ練習を行うコースウェアを開発した。本教材の特徴は、会話の途中で投げかけられる問いに対する2通りの反応によって、会話の流れが変化する点にあり、固定的・人工的なロールプレイ練習に若干のインタラクティブな感触を持たせている。この、流れを選択しロールプレイを続行する部分の使い勝手について、中級前半と上級の韓国人日本語学習者にインタビューし、意見を聞いた。どちらのレベルでも、会話の方向を選択すると同時に自動的にロールプレイが再開される方式よりも、学習者自身の準備が整ってから、自分で操作してロールプレイを再開する方法が支持されたが、上級者の中には、自動再開のほうがやや難易度が上がるので好ましいとする者もあった。

5. 理工系留学生を対象とした読解 e-learning の評価 - 日本語教師と外国人留学生の視点の相違を中心に -
加藤 由香里 (東京農工大学)

本研究では、外国人留学生と日本語教師を対象に、具体的な学習場面を設定し、e-learning を利用した読解学習の問題点を明らかにすることを旨とした。実験では、構成が異なる2種類の e-learning 読解コンテンツ(言語用法型・言語使用型)を作成し、外国人留学生22名と日本語教師20名を対象に読解コンテンツの評価実験を行った。コンテンツの評価は、33項目からなる質問紙作成して行った。その結果、外国人留学生からは、図表を用いた解説方法などの新しく実現された学習内容に対して肯定的な意見が多かった。一方、日本語担当教師は、新しい課題に期待を示しながらも、実際に e-learning 上の読解課題に対しては提示方法や解説の適切さ、および困難度に否定的な傾向が見られた。

ポスター発表(上記5件を含む10件)

6. 病院会話におけるやりとりの役割 - 発話末形式、発話機能の着目して -
永井涼子 (筑波大学大学院生)

本研究は、病院会話「申し送り」を話し手と聞き手のやりとりの有無によって類別し、その特徴を分析したものである。やりとりの有無によって大きく二つに分けた会話を発話末形式および発話機能に着目して分析した。発話末形式は、やりとりのない会話の場合、全発話者がほぼ同様の割合で各形式を使用している状況が観察された。対して、やりとりのある場合は使用状況に個人差が大きく、一定の傾向を見出すことができなかった。発話機能においては、やりとりのある会話に比べ、やりとりのない会話では機能の種類も少なく、使用状況にも一定の傾向がみられた。また発話機能と発話末形式に関連性があることも観察された。つまり、やりとりのない会話は表現・機能上ある一定の談話パターンを形成している。また、その談話パターンは簡潔であり、病院会話の特性に合致した性質を有している。以上のことから、やりとりは談話パターン形成に影響を及ぼしていると考えられる。

7. 日本語アクセントに関する知識と意識との関連 - 来日直後のタイ語母語話者の場合 -
スィリポンパイブーン・ユパカー (国立国語研究所)

来日直後のタイ人日本語学習者が、日本語のアクセントについてどんな知識をもっているか、またどの程度アクセントを意識しているか、アンケート、フォローアップ・インタビューを通して探った。調査の結果、1) アクセントに関する知識も意識もほとんどない学習者、2) 知識はあるが意識が薄い学習者 3) 知識も意識もあるがそれぞれまだ不十分な学習者、という3タイプの学習者が見られ、アクセント産出においてそれぞれ異なる傾向を示していた。

8. 財団法人徳島県国際交流協会における日本語教室の取り組み
村澤普恵 (徳島県国際交流協会)

財団法人徳島県国際交流協会では、県からの委託事業として、現在月曜日と土曜日を除く毎日日本語教室を開催しているが、予算削減により、今年10月以降、新しく開設する教室も含めて、既存の日本語教室もボランティア教室に切り替えて行くことになっている。その準備として現在、そのボランティア教室に携わってくださる日本語指導ボランティアの実践的な講座を開催している。この講座は、昨年度県内の4カ所で開催した「地域日本語指導ボランティア養成講座」の完結編ともいべき講座で、今年10月から実際にボランティアで外国人に日本語指導する予定者に対する実践講座である。この講座修了生でボランティア指導者グループを作り、外国人への日本語指導に携わっていただく予定である。日本語学習者に適切な日本語教室を提供することを第一に考えながら、既存の日本語教室とこれから開設するボランティア教室との関わりをどのようにするか、日本語学習者の方にいかに大きな負担をかけずに日本語指導に携わっていただくかが課題である。

9. 非漢字圏理工系学部留学生の漢字力をどう伸ばすか - 既有漢字知識を生かした発展学習のための基礎的調査
向井留実子・串田真知子・菅野真紀子・築地伸美 (愛媛大学)・吉井隆明 (国立印刷局)

非漢字圏理工系学部留学生は、入学時点において高校の理数系科目を学習しているため、それらの科目に関わる基礎語彙の漢字知識は有しているが、一般に使用される漢字語の理解が十分にできず、一般科目学習ばかりで

なく、専門科目の学習に支障をきたしている場合が多い。このような留学生の漢字力を伸ばすには、既有知識を土台にして、より汎用性のある漢字や漢字語を体系的に導入していき、応用力をつけることが肝要と考えられる。そこで本研究では、留学生が学習した高校教科書のうち物理と物理に出現する漢字・漢字語の計量と分析を行い、その結果を参考に作成した熟語の再認テストで留学生の習得知識の傾向を調査した。その結果、留学生は1級語彙より物理教科書に頻出する語の定着がよく、特に物理教科書に頻出する上位300漢字を含む語の定着率が高いことが明らかになった。

10. ビデオ教材における書き起こし文提示法に関する考察

武田知子・吉橋健治・阿部川武(東京工業大学大学院生)・仁科喜久子(東京工業大学)

マルチメディア教材を作成するために、講義、インタビューなどから成るビデオ及びその書き起こしテキストを作成した。マルチメディア教材として、書き起こしテキストを映像に同期して表示する機能があると教材の理解に有効であると考えた。そこで、ビデオ及びその書き起こしテキストの表示方法に関する実験を行った。本実験では理解度を相対的に評価するために留学生及び日本人を対象にして、「書き起こしテキストがないもの」「ビデオで発話中の1文及びその前後の文を表示するもの」「書き起こしテキスト全文を表示するもの」の3つのタイプの表示法でビデオを見せ、正誤問題の正答率により評価した。各群の正答率をt検定により検定した結果、いずれも有意差は出なかった。その原因を、学習者のレベル、質問の適切さ、テスト方法の適切さなどの観点から考察した。

【午後の部】

講演

「佐々部映画が照らす国際交流の底流」

小島 聡(東京工業大学)

今年1月、東京工業大学留学生センターでは、「日韓プログラム5周年記念事業」で映画『チルソクの夏』上映会と佐々部清監督講演会を実施した。2005年の日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した『半落ち』(2004)の佐々部監督は『チルソクの夏』(2003)では韓国人を、『カーテンコール』(2005)では在日韓国人をめぐる日本人の感情や意識を描き出し、映画を見る我々自身もまた、それぞれの中にある外国人に対する感情と向き合うこととなった。周囲のムードがどうであれ、まず我々は個人のレベルで過去の自分がどうであったか、そして現在はどうかを冷静に見つめ、その上で将来はどうあるべきかを団体レベルで考える必要がある。このような重要な問いかけを与えてくれた佐々部監督の活動と、佐々部映画を支える山口県下関市の人々の取り組みを紹介して、我々がこれからの国際交流を考える上での一助としたい。

口頭発表(5件)

11. ベトナム人学習者への発音指導の一例

中村倫子(徳島大学)・重川明美(海外技術者研修協会)

イントネーションやアクセント、発音の大切さを学習者に自覚させ、意識して継続的、自主的な学習を行う力を養い、学習者の発話をより聞きやすく、より有効なものにする方法は何か。本発表ではベトナム人学習者を対象に、発話の問題点を探り、問題の解決と発話状態の改善を期しての3ヶ月にわたる指導の試みと結果、その評価を報告する。まず問題点を1) 拍の概念 2) 個々の発音 3) 発話の状況 の面から特定し、次にそれらを解決するために効果的と思われる指導方法、練習方法をどのように選択、実行したかについて述べる。2ヶ月経過後、指導に対する学習者の反応を見るために行ったアンケート調査をもとに、学習者が発音練習の重要性に対する意識を持ったかどうか、自主的に学習を継続しているかどうか、また学習者の発話能力が伸びたかどうかを客観的に判断し、練習方法が有効か否かを考察する。

12. システム・エンジニア向け日本語学習コースウェアの開発

高橋亜紀子(宮城教育大学)・小河原義朗(国立国語研究所)・才田いずみ(東北大学文学研究科)

・井口寧・堀井洋(北陸先端科学技術大学院大学)・川添良幸(東北大学金属材料研究所)

現在、日本内外で日本語ができるシステム・エンジニア(SE)の需要が高まっている。そこで、本研究グループ

は、SE の日本語学習に特化したコースウェアを開発した。これは、特定の目的に特化したコースウェアを開発することによって、学習者の動機の維持が難しい遠隔学習の弱点克服を図ると共に、需要のある SE 向けの日本語学習ニーズに応えようとするものである。また、特定目的の利点を生かし、学習者の背景知識をフル活用した上で、語彙・表現の難易度は落とさず、構文をやさしくすることによって、サバイバルレベルの日本語からでもレベルアップができるようにコースを設定した。コンテンツは、SE と顧客との実際の交渉場面を基に作成しており、専門性が非常に高いものになった。

13. 対訳付き日本語作文データベースに基づくモンゴル語母語話者の誤用分析

松田真希子（長岡技術科学大学）

本研究はモンゴル語母語話者による対訳付日本語作文データベースに見られる名詞句の誤用を分析することにより、モンゴル語母語話者には（１）AN（きれい人）という形容詞語幹が名詞に直接接続した誤用が多く見られること、（２）AなNをAのNとする「の」「な」の選択に関する誤用が見られること（３）複合名詞句の使用回避の傾向が見られることを指摘したものである。そしてそれらの傾向は母語の転移である可能性、また日本語自体の品詞分類の曖昧さによる可能性があることを指摘した。トラジェジーの育成には課題が残されていることが明らかとなった。

14. 学習者が話す力を自ら高めていけるようにするための会話教育

深尾百合子・越前谷明子・馬場眞知子・田崎敦子（東京農工大学）

科学技術系大学院で研究する留学生にとって日本語のスキルの中では会話能力が最も重要だと指摘されている。このような留学生は、日本語を学習できる期間が限られている。日本語学習終了後は、その期間中に学んだ内容を基に研究活動の中で日本語を使いながら、自ら運用力を高めていくことが期待される。このような留学生に有効な会話教育方法を提案する。この会話教育の目的は、話し相手に不安感・不快感を与えずに情報伝達・交換を可能にする言語・非言語行動の習得、会話の開始から終結までの「会話の流れ」という概念の理解、会話を分析的に捉える視点の獲得の3つである。本稿では、東京農工大学留学生センターの会話教育の基本概念である「会話の流れ」を構成する2つの要素を「談話構成要素」と「共話促進要素」と名付け、この概念を基にした指導方法として約10年間実践してきた「会話クイズ」を紹介する。

15. 用言における誤用タグ付け支援システムの開発

橋本信作（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本研究の目的は、日本語学習者コーパスのための誤用タグ付け支援システムを開発することである。本システムは、利用することでコーパスの多様なヒントを参考に非専門家でもタグ付けできるようにすることを目指す。システムのためのデータベース作成時には寺村秀夫(1990)、大曾美恵子 他(1999)、市川保子(1997)などの先行研究を参考に日本語学習者の用言の用法を分類した。またデータベースを拡充するために外国人学習者の誤用例文を収集した。

ポスター発表（上記5件を含む9件）

16. 初級日本語学習者によるポスター発表後の日本語母語話者の質問

- 質疑応答における話題転換の「前置き」の有無 - 高橋澄子・菅原和夫（東北大学）

専門教育との連携が求められている日本語教育において口頭発表や論文作成に関する研究報告はあるが、それらに勝るとも劣らない重要性を持つ質疑応答に言及したものが極めて少ない。質疑応答では学習者の理解と発話に焦点が当てられ、母語話者の質問はあまり注目されて来なかった。しかし、本来質疑応答は質問者と応答者の両者が協働活動を行うことである。この捉え方からすれば母語話者の質問の仕方も検討する必要がある。本稿は、質疑応答に関し母語話者同士の場合と比較して、接触場面では母語話者がどのような質問の仕方をしているかその実態を明らかにする。また、話題転換における質問に「前置き」があるかないかが質疑応答の成立に影響を及ぼしていることも指摘する。

17. 双方向型プロジェクトワークの役割 - 「日本人への提言」作成とその評価 -

山田久美子（兵庫県立芦屋国際中等教育学校）・Gehrtz-三隅友子（徳島大学）

NHK 教育テレビのプログラムのひとつである「視点・論点」を教材とした大学生のための教育活動を報告する。この番組は各分野の専門家が最近の国内外の問題に対して、専門語をわかりやすく説明することと、問題に対する話し手の意見を8分で述べるものである。教師は、素材の選択 教材への加工（スクリプト・語彙シート・理解を深めるための様々なタスク） 授業内での提示 を通して、学習者が 時事問題の理解 様々な話者のスピーチスタイルを知ることを授業の目標とした。また最終課題として学習者はテーマを各自選び、授業を通して得た知識や見解を「日本人への提言」としてまとめた。これを複数の日本人に読んでもらい、提言に寄せられたコメントを学習者に渡した。結果、学習者は日本語教師からは日本語の評価を受け、一般の日本人からは提言に対する評価を得た。本発表は、大学における日本語教育の教師の役割を述べるとともに、日本人との意見交換を紙上で行う双方向型の活動の意義を考察する。

18. 地域と大学が生んだ日本語教育の一面とその実践 - 吉野川市におけるドイツ高校生の日本語・日本文化体

吉野美保・野口優子・小林由美（吉野川市国際交流協会）・大石寧子・桂修治（徳島大学）

ドイツ北部「レムゴ市」のケンペルギムナジウムの日本語講座に通う生徒10人の10日間の受け入れをこの夏「吉野川市国際交流会（YIA）」は、大学と連携して行った。YIAメンバーの技能や培ってきた財産を元に、ボランティアグループができる日本語教育、ボランティアグループだからこそできる日本語教育という視点で、初めての受け入れに挑戦した。地域公共団体がとらえる日本語教育とは、異文化交流・多文化共生ができる「まちづくり」のための「ひとづくり」に大きく関わっているのではないだろうか。私たちの行ったプログラムを通し、地域の行う日本語教育の意味・方法について、また大学との連携について報告すると共に、参加の皆様と意見交換ができればと考える。

19. 実習授業の講評会のあり方

河野俊之（横浜国立大学）

日本語教育実習では、多くの場合、他者による評価が行われてきたが、それでは、実際に教師となって、他者による評価が得にくい中では、内省的実践につながりにくい。そこで、本研究では、実習における講評について実習生に考えさせるために、実際の実習を収録した市販ビデオに基づいて、＜指導者の講評＞を実習生に考えさせた。その結果、実習生が考えた＜指導者の講評＞は、「いい授業」の条件があり、それと照らし合わせ、足りない点について述べられていることがわかった。また、それは、実際の実習生の講評でも同様であり、また、ほぼ同じコメントが見られることから、指導者の講評の役割を再考する必要があることがわかった。授業の「観察」「振り返り」などを指導者が肩代わりしては、実習生の内省的実践家の基礎を身につける機会を奪うことになることから、講評会では、実習指導者も含め、実習生自身の内省的実践を直接支援するべきであるとした。

【昼食について】

当日は学内の食堂は営業していません。大学周辺の店を利用するか、コンビニ等でお弁当をお買い求めの上、会場でお食べください。会場にランチマップを用意する予定です。

【懇親会】

大学生協の第一食堂にて懇親会を行います。是非ご参加ください。当日中に徳島空港を出発予定の方も、空港と大学はバスで20分の距離ですので、空港行きのバスの時刻表を調べた上で参加をお願いいたします。

【会費納入のお願い】

2005 度の会費（3000 円）が未納の方は早急にお支払いいただけますようお願いいたします。2 年未納の場合は会員資格を失いますのでご注意ください。会費は、研究会会場受付にてお支払いいただくか、郵便局にて以下の口座にお振込みください。会費振込口座は電信振込しかご利用いただけませんので、ご注意ください。ご不明な点がありましたら、jlem@ryu.titech.ac.jp まで email にてお問い合わせください。

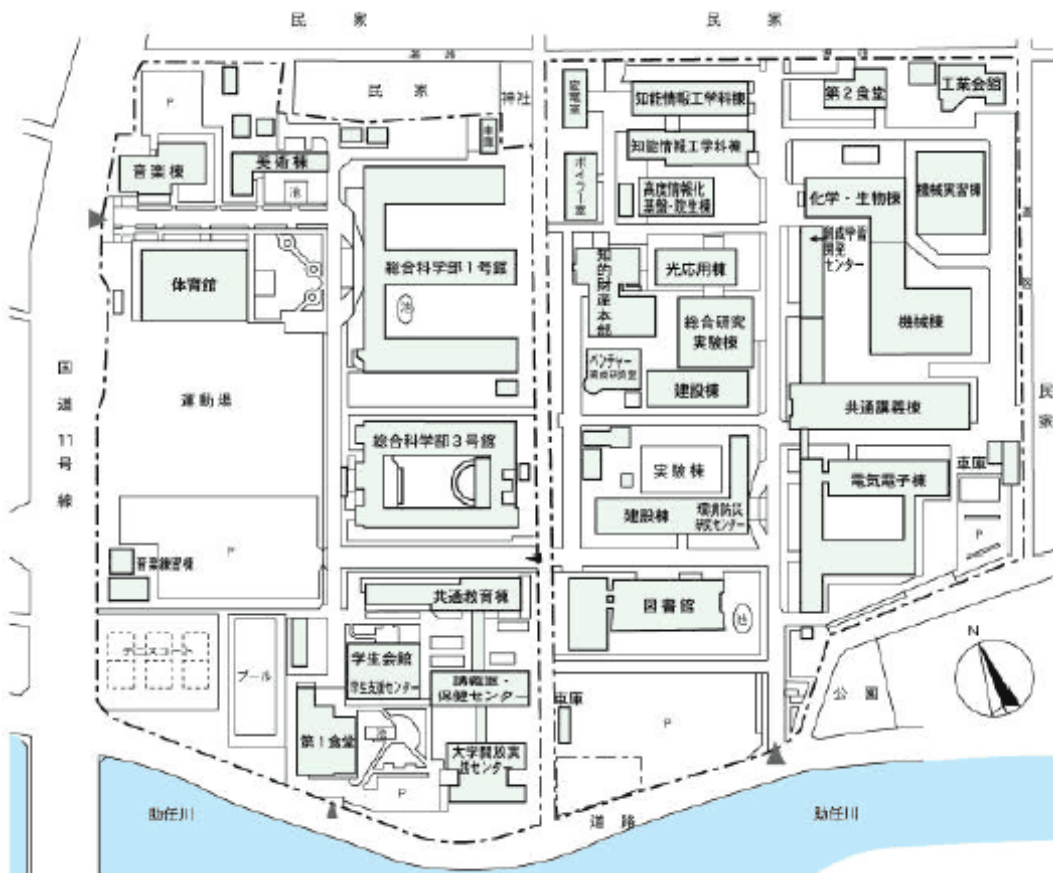
【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

【会場案内】

徳島大学常三島^{じょうさんじま}キャンパス 大学開放実践センター

下のキャンパスマップの下方（南側）にあります。
キャンパスへの門は、同じく下方にある第 1 食堂の南側の門を利用すると分かりやすいです。

バス停はキャンパスマップの左方（西側）にあります。空港バスは国道 11 号線を、徳島駅発着の市バスはもう一つ西側の通りを通ります。



じょうさんじま
【徳島大学常三島キャンパスへの交通】

徳島駅から

・バス

駅からのバスは、市バスと徳島バスがありますが、初めての方は本数の多い市バスをご利用ください。

のりば	路線番号	行先	下車する停留所
5	なし	循環バス（左回り）	助任橋（すけとうばし）
	6	島田石橋	助任橋
6	3	商業高校, 中央卸売市場	助任橋
	5	商業高校（旧道廻り）	徳島大学前
7	2	吉野川橋	助任橋
	7	富吉団地（吉野川大橋経由）	助任橋

わからない時は、駅前バス発着所の中にバス案内所がありますので、そこで確認してください。
所要時間は7・8分で、バス代は200円です。

・タクシー

「徳島大学・常三島（じょうさんじま）キャンパス大学開放実践センター玄関」と伝えてください。

南側の門（助任川に面した最初の入口）から入構してもらいます。駅前より800円弱です。

空港から

・バス

飛行機の到着にあわせて空港玄関前より徳島駅行きの空港バスが出ます。徳島駅手前の「徳島大学前」で下車してください。バス代は430円です。

・タクシー

2500円前後です。駅からの場合と同様に運転手に伝えてください。